

特集

臓器提供 臓器移植

1997年に臓器移植法が、そして2010年に改正臓器移植法が施行されました。その間に今号企画担当者は外科医として、あるいは救急医として、脳死下での臓器提供、臓器の摘出、そして移植、移植後の管理と、臓器提供・臓器移植のさまざまな時相に携わる機会を得ました。それぞれの局面にドラマがあり、それぞれのメンバーに役割があります。そこで思ったのは、本人や家族の臓器を提供したいという意思を受け、臓器移植を待ち望む患者によりよい形でつないでいくためにはどうしたらよいのだろうか、ということです。現実的には、臓器提供・臓器移植に携わる各医療スタッフは、自らの仕事は理解していても、他科医師や他職種スタッフの役割や考え方までは十分に理解できておらず、それが関係者間での摩擦につながることもあると思われます。また、移植医療の実践は限られた施設にとどまっており、移植医療や臓器提供・移植後のケアはまだ日常のものとして認識されていないのも実情でしょう。

フランスの画家、ポール・ゴーギャンの絵に「我々はどこから来たのか 我々は何者か 我々はどこへ行くのか」というものがあります。何のために移植医療があり、現状では何が行われてどのような状況で、今後どうなっていくのか、どうしていくべきなのか。それを今一度学ぶために今号では、移植医療に関する総論的な内容から関連スタッフの実際の動き、そして、本誌読者の救急医がとくに携わるであろう患者・家族対応や脳死判定のポイントについて、臓器提供・臓器移植の両面から取り上げる特集を企画いたしました。

救急領域の先生方のみならず、臓器提供・臓器移植の各局面に携わるさまざまな専門・立場の先生方から、貴重な解説をいただきました。まさに、移植医療の全体が描かれた“絵”のような本特集号が、救急の場からのよりよい移植医療の展開につながることを確信し、お届けします。

『救急医学』編集委員会

企画担当：堺市立総合医療センター救命救急センター 白井 章浩